

お忙しくても、約 2 分間で読めます

ハートフル・ワード (心からの言葉)

山内公認会計士事務所

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

日本のモノ作りの仕組みが変わる 永守 重信 (日本電産社長)

1. 多くの日本企業は、中国など新興国の企業がどんどん安いものを出してくる時、「我々は高級品でいく」と考える。大企業ほどすぐにそう言う。私が日本電産を創業した 1973 年、米国には RCA という巨大電機メーカーがあったけど、十数年でつぶれた。誰にやられたかというとな日本の電機メーカーだ。今で言えば、韓国や台湾、中国のメーカーにやられたようなものと言えるだろう。
2. どうしてやられたかと言うと、高級品に逃げて低価格は OEM (相手先ブランドでの生産) にしたわけだ。今、日本の会社が中国の会社や台湾の会社にパソコンやほかのモノを作らせているが、それに似ている。高価格品市場だけで生きていけるというのは、技術的過信に基づいた発想で、とても危険だ。技術的過信は、企業と国の双方を危い方向に持っていく。
3. 震災からの復興過程では、安くいいモノを早く作るころから部品や部材を調達するようになるだろう。これは不可避の潮流だ。自由競争に完全に身を置かないと、日本企業は世界の中でもう勝てない。在庫を持たないと、ジャスト・イン・タイムとか言い続けてきたが、そういう効率の追求だけではダメだということが、今回の震災で分かったのではないか。日本が強みにしてきたモノ作りの仕組みが変わらざるを得なくなると思う。

(参考:「日経ビジネス」2011年5月30日号)

経営者のための理念・哲学

いつも真剣勝負

1. 中川一政氏は明治 26 年、東京本郷に生まれた。氏がはじめて絵を描いたのは 21 歳の時。そこから氏の求道人生が始まる。「志」は「士」と「心」ではなく、「之」と「心」でできた文字、というのが中川氏の持論だった。「心」が「之」(行く)の意で、心が方向を持つことだという。
2. 中川氏 95 歳の誕生日のスピーチがある。「長生きしようと努力したわけではないが、気がついたら 95 になっていた。芭蕉がその最期の時に、弟子にどれが辞世の句かと聞かれ、自分にとって一句一句辞世でなかった句はない、といっているが、私はこれからの一日、一日をそういうふうを送りたいと思う。「稽古をしてはならぬ。いつも真剣勝負をしなければならぬ」。この言葉を自戒としたのである。

(参考:「致知」:2011年9月号)

新規成長分野

都市鉱山では日本は資源大国

鎌田 浩毅 (京都大学大学院教授)

1. 日本は世界でも屈指のレアメタル消費国です。もし廃棄される家電製品からレアメタルをリサイクルできれば、日本は金、銀、インジウム、タンタルなどが豊富な資源大国となる可能性を持つのです。たとえば日本の都市鉱山に存在する金は世界の埋蔵量の 16% に当たる 6800 トン、銀は 22% に当たる 6 万トンとそれぞれ推計されています。
2. 実は日本は過去、鉱床を探索・開発する技術に関しては世界のトップレベルにありました。30 年以上前、国内には 100 を超える金属鉱山が存在し、鉱床学や鉱山学に関する豊富な蓄積がありました。その後、相次ぐ閉山に伴って技術が散逸してしまいました。技術の伝承は危機的状況にありますが、もう一度本腰を入れて取り組めば世界に追いつくことは可能です。それは資源小国である日本の生き残りにもつながる重要な方策なのです。

(参考:「週刊東洋経済」2011年6月11日号)

古典に学ぶ

人間は理想を持たねばならぬ

「およそ目的には、理想が伴わねばならない。その理想を実現するのが、人の務めである」。

現代の言葉で言うと、「ある成果を目的に定めて行動する場合、その成果を目指すだけの、理想、理念がなければならぬ。なぜなら、目的を達成するだけでなく、その理想をも実現するのが、人間の義務だからである。

(参考: 渋澤健「渋沢栄一 100 の金言」: 日経ビジネス人文庫)